

國學院大學學術資料センター研究報告 第31輯 2015年3月

Memoirs of the Curatorial Research Center, Kokugakuin University No.31 March 2015

松浦武四郎の「大首飾り」について

内川隆志

松浦武四郎の「大首飾り」について

内川隆志

はじめに

東京世田谷の静嘉堂には、好古家松浦武四郎（1818-1888）の残した古物が多数収蔵されている。今回、その中の一つである、大首飾りについて若干の分析を試みるものである。

明治15（1882）年に撮影された65歳の松浦武四郎唯一の肖像写真（写真1）には、頸に架けられた大首飾りが写り、松浦武四郎記念館の所蔵する『藏品目録』には「一勾玉首掛壺連」と題され、その内訳「一金環壺個、一銀環五個、一勾玉大小六十個、一管玉七十三個、一切子玉六十九個、一丸玉三十一個、一石壺個」計240個が記録されている。肖像写真の他には、河鍋暁斎（1831-1889）の筆による『武四郎涅槃図』（写真2）に登場し、午睡する武四郎翁の首に大首飾りが首に架けられている様子が描かれている。このように大首飾りは、メモリアルな局面に必ず登場する武四郎蒐集古物の代表格と言っても過言ではない（内川編2013）。



写真1 松浦武四郎肖像写真
（松浦武四郎記念館蔵）

大首飾りの内容

この大首飾りは、「奇彩千秋／馬角／靈光万古」と墨書された木箱の上段引出しに収められ、玉類の総数は、現状で243点を数える（表1）。内訳は碧玉製管玉（表1-1～72）72点を数え、その多くは出雲花仙山産と思われる濃緑色を呈するものである。滑石製管玉（表1-233・234）2点、瑪瑙製管玉（表1-232）1点、碧玉製勾玉（表1-73～78）6点、硬玉製勾玉（弥生時代）1点、硬玉製勾玉（表1-80～86）7点、瑪瑙製勾玉18点（表1-88～104）、水晶製勾玉（表1-105～109）5点、ガラス製勾玉（表1-236）1点、滑石製勾玉（表1-110～132）23点、水晶製切子玉（表1-133～200）68点、水晶製丸玉（表1-201～220）20点、瑪瑙製丸玉（表1-221～231）11点、瑪瑙製八角玉（表1-235）1点、金環（表1-238）1点、銀環（表1-239～243）5点、硬玉製垂飾（表1-237）1点を連ね総長は140cm以上を測る。

全体を11分割（図1-A～K）し、それぞれの部位ごとに玉類の配置を詳しくみてみよう。

首に架けた際に正面になるAには、赤瑪瑙八角玉（235）から碧玉管玉（15）を垂下し、水晶製勾玉

(109) を起点に右に水晶製切子玉 (172)、碧玉製管玉 (19)、滑石製勾玉 (114)、碧玉製管玉 (20)、滑石製勾玉 (115)、碧玉製管玉 (21)、水晶製切子玉 (173)、ガラス製勾玉 (236) を連ねる。左にも同種の玉の配列で、水晶製切子玉 (174)、碧玉製管玉 (16)、滑石製勾玉 (116)、碧玉製管玉 (17)、滑石製勾玉 (117)、碧玉製管玉 (18)、水晶製切子玉 (175)、碧玉製勾玉 (73) を連ねる。全体に小ぶりの玉類を連ねているのが特徴で、左右に垂下する玉の大きさや色目を整えている。赤瑪瑙八角玉 (235) とBに記した赤瑪瑙製丸玉 (228)、赤瑪瑙製丸玉 (229) は近代の所産であろう。

Bは、赤瑪瑙八角玉 (235) から左右に伸びる部位で、右方向に赤瑪瑙製丸玉 (228)、碧玉製管玉 (1)、水晶製勾玉 (106)、碧玉製管玉 (2)、水晶製勾玉 (105)、碧玉製管玉 (3)、水晶製切子玉 (163) を連ねる。左方向には、赤瑪瑙製丸玉 (229)、碧玉製管玉 (14)、水晶製勾玉 (107)、碧玉製管玉 (13)、水晶製勾玉 (106)、碧玉製管玉 (12)、水晶製切子玉 (164) を連ねる。正面横方向に、瑪瑙製八角玉を主玉として左右に大振り水晶玉を配置するのが特徴でである。

Cは、中央の環状に連ねたDに頭を通したときに丁度胸の中央に位置する部位にあたるため翡翠玉5点が主珠として配置される。総長は、25cmを計る。大首飾りで唯一用いられている金環 (238) から、赤瑪瑙の六角管玉 (232)、赤瑪瑙製丸玉 (221)、碧玉製管玉 (22)、赤瑪瑙製丸玉 (222)、水晶製切子玉 (133)、赤瑪瑙製丸玉 (223)、硬玉製垂飾 (237)、赤瑪瑙製丸玉 (224～225) から左右に分岐させる。右に滑石製管玉 (234)、硬玉製勾玉 (80)、碧玉製管玉 (24)、水晶製切子玉

(134)、硬玉製勾玉 (79) を連ねる。左には、滑石製管玉 (233)、硬玉製勾玉 (81)、碧玉製管玉 (23)、水晶製切子玉 (135)、硬玉製勾玉 (82) を連ねる。注目すべきは硬玉製勾玉4連の前に、敢えて地味な滑石製の管玉を配置している点であろう。赤瑪瑙製丸玉の上に配置される垂飾は、唯一の縄文時代後期

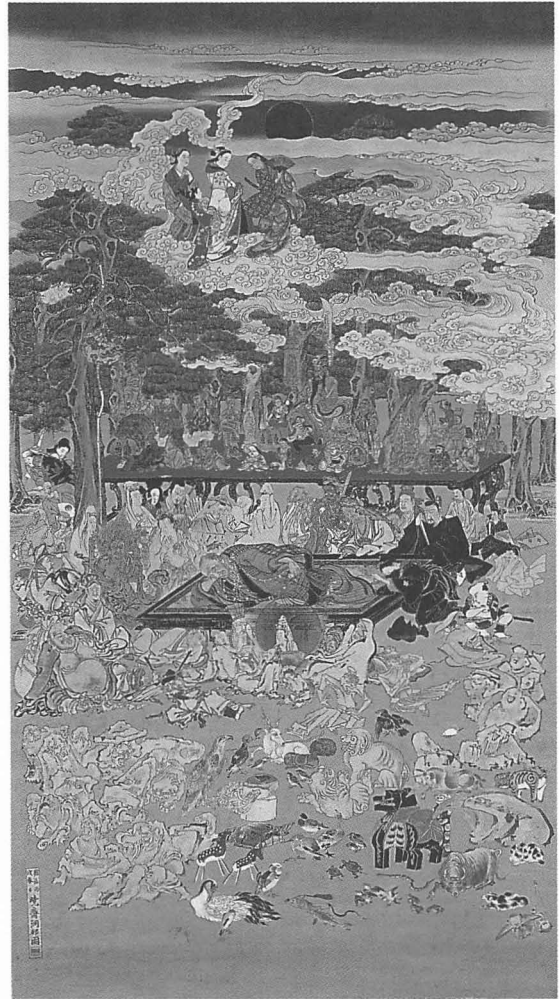


写真2『武四郎涅槃図』(松浦武四郎記念館蔵)



写真3『武四郎涅槃図』部分(同上)

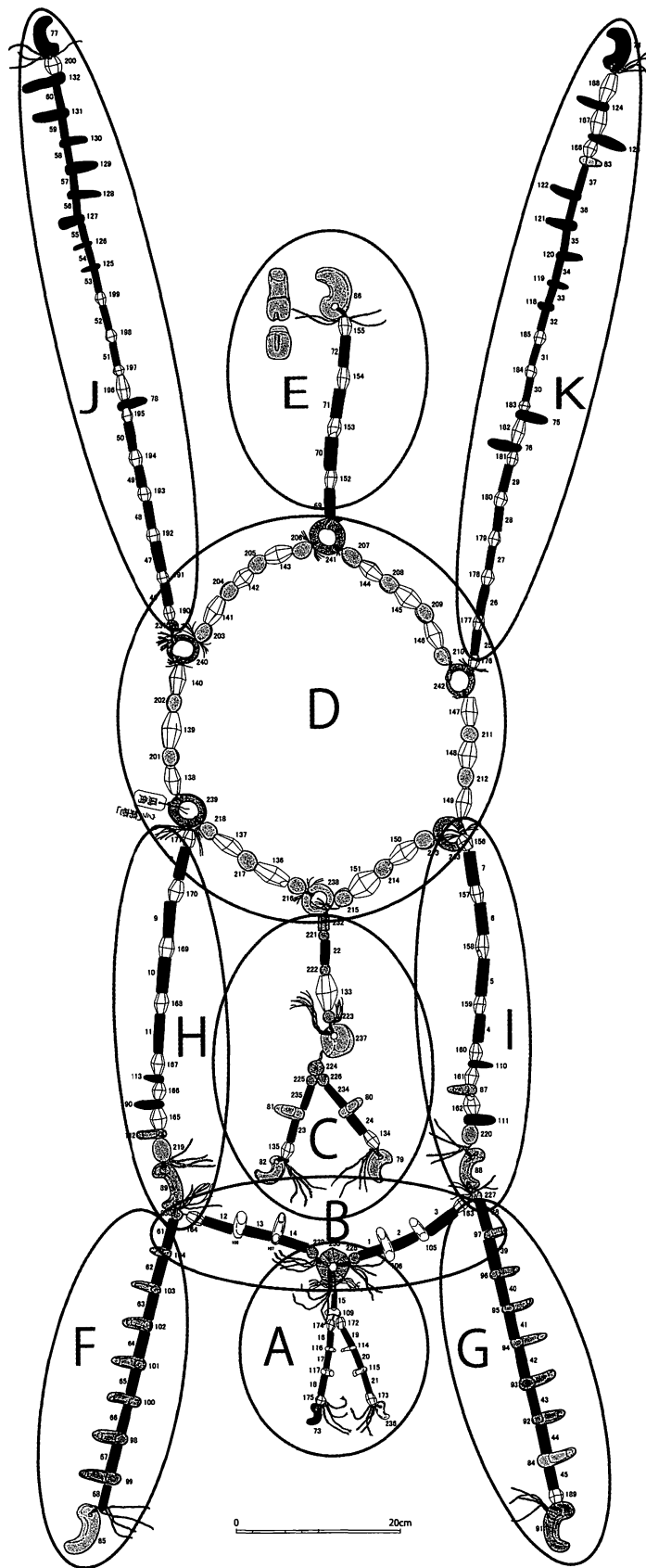


图1 大首飾切実測図

表1 大首飾り玉類計測表(1)

番号	収納箱/箱書	収納位置	番号	資料名称	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	孔径:左右 (cm)	素材	時代	備考
			1	管玉	2.2	0.8	0.3 0.15	碧玉		
			2	管玉	2.6	0.7	0.25 0.1	碧玉		
			3	管玉	3.2	0.8	0.25 0.2	碧玉		
			4	管玉	2.6	1	0.4 0.2	碧玉		
			5	管玉	3.5	1	0.25 0.1	碧玉		
			6	管玉	2.7	0.9	0.3 0.15	碧玉		
			7	管玉	3	1	0.25 0.15	碧玉		
			8	管玉	3	1	0.5 0.15	碧玉		
			9	管玉	3.15	1.1	0.3 0.15	碧玉		
			10	管玉	3.1	1	0.2 0.35	碧玉		
			11	管玉	3.5	1	0.4 0.3	碧玉		
			12	管玉	2.7	0.7	0.3 0.1	碧玉		
			13	管玉	2.5	0.7	0.3 0.1	碧玉		
			14	管玉	2.6	0.8	0.25 0.15	碧玉		
			15	管玉	1.3	0.4	0.25 0.1	碧玉		
			16	管玉	1.5	0.5	0.2 0.1	碧玉		
			17	管玉	1.6	0.5	0.25 0.1	碧玉		
			18	管玉	2	0.5	0.2 0.1	碧玉		
			19	管玉	1.8	0.5	0.2 0.1	碧玉		
			20	管玉	2	0.5	0.2 0.1	碧玉		
			21	管玉	2	0.4	0.2 0.15	碧玉		
			22	管玉	2.2	0.8	0.25 0.15	碧玉		
			23	管玉	2.1	0.8	0.2 0.1	碧玉		
			24	管玉	2.1	0.8	0.2 0.15	碧玉		
			25	管玉	2.1	0.7	0.4 0.2	碧玉		
			26	管玉	2.7	0.8	0.4 0.2	碧玉		
			27	管玉	2.2	0.7	0.2 0.1	碧玉		
			28	管玉	2.2	0.7	0.3 0.2	碧玉		
			29	管玉	2.4	0.6	0.2 0.1	碧玉		
			30	管玉	2.2	0.6	0.3 0.1	碧玉		
			31	管玉	2	0.6	0.2 0.1	碧玉		
			32	管玉	1.8	0.55	0.2 0.1	碧玉		
			33	管玉	1.4	0.6	0.2 0.15	碧玉		
			34	管玉	2.1	0.6	0.2 0.15	碧玉		
			35	管玉	1.9	0.6	0.3 0.1	碧玉		
			36	管玉	1	0.6	0.2 0.15	碧玉		
			37	管玉	2.5	0.6	0.3 0.2	碧玉		
			38	管玉	2.8	1	0.3 0.15	碧玉		
			39	管玉	2.8	1	0.25 0.15	碧玉		
			40	管玉	2.5	0.9	0.3 0.15	碧玉		
			41	管玉	2.4	0.9	0.3 0.15	碧玉		
			42	管玉	2.9	1	0.2 0.1	碧玉		
			43	管玉	2.5	0.9	0.3 0.1	碧玉		
			44	管玉	2.8	0.9	0.3 0.1	碧玉		
			45	管玉	2.2	0.8	0.25 0.15	碧玉		
			46	管玉	2	0.8	0.2 0.1	碧玉		
			47	管玉	2.7	0.8	0.3 0.15	碧玉		
			48	管玉	2.4	0.6	0.2 0.15	碧玉		
			49	管玉	2	0.75	0.25 0.1	碧玉		
			50	管玉	2.8	0.7	0.3 0.15	碧玉		
			51	管玉	2.2	0.7	0.3 0.1	碧玉		
			52	管玉	2.4	0.7	0.2 0.1	碧玉		
			53	管玉	2	0.6	0.3 0.1	碧玉		
			54	管玉	1.8	0.7	0.2 0.1	碧玉		
			55	管玉	1.6	0.7	0.25 0.1	碧玉		
			56	管玉	1.6	0.7	0.3 0.15	碧玉		
			57	管玉	1.8	0.7	0.25 0.1	碧玉		
			58	管玉	1.6	0.6	0.25 0.1	碧玉		
			59	管玉	1.95	0.7	0.2 0.1	碧玉		
			60	管玉	2.4	0.7	0.2 0.35	碧玉		
			61	管玉	3.7	0.9	0.2 0.2	碧玉		
			62	管玉	2.7	0.9	0.25 0.1	碧玉		
			63	管玉	2.5	1	0.25 0.1	碧玉		
			64	管玉	2.6	0.8	0.3 0.15	碧玉		
			65	管玉	2.4	0.7	0.3 0.1	碧玉		
			66	管玉	3	0.9	0.4 0.15	碧玉		

1

(引出上段)
〔墨書〕
神世
瓊瑤
〔墨書〕
明治十三年
庚辰十二月
二十八日為北
海老先生題
松藤如鶴氏

引出上段

古墳時代

表1 大首飾り玉類計測表(2)

番号	収納箱 / 箱書	収納位置	番号	資料名称	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	孔径:左右 (cm)	素材	時代	備考	
			67	管玉	2.7	0.9	0.25 0.1	碧玉	古墳時代		
			68	管玉	2	0.7	0.3 0.15	碧玉			
			69	管玉	2.7	1.1	0.25 0.2	碧玉			
			70	管玉	2.8	1.2	0.3 0.1	碧玉			
			71	管玉	2.5	1.2	0.3 0.1	碧玉			
			72	管玉	2.9	0.9	0.25 0.1	碧玉			
			73	勾玉	1.8	0.6	0.25 0.2	碧玉			
			74	勾玉	3.3	1.6	1.1 0.2	碧玉			
			75	勾玉	2.2	0.8	0.3 0.15	碧玉			
			76	勾玉	2.9	0.8	0.3 0.2	碧玉			
			77	勾玉	3.8	1.3	0.25 0.2	碧玉			
			78	勾玉	2.6	0.8	0.3 0.35	碧玉			
			79	勾玉	3	1.1	0.4 0.2	硬玉			
			80	勾玉	3.1	1.1	0.35 0.2	硬玉			
			81	勾玉	2.8	0.8	0.5 0.2	硬玉			
			82	勾玉	2.9	1.1	0.4 0.15	硬玉			
			83	勾玉	2	0.6	0.3 0.2	硬玉			
			84	勾玉	3.6	1.1	0.3 0.15	硬玉			
			85	勾玉	4.6	1.3	0.35 0.25	硬玉			
			86	勾玉	4.5	2.6	0.6	硬玉			弥生時代
			87	勾玉	2.5	0.8	0.25	瑪瑙			
			88	勾玉	3.6	0.9	0.25	瑪瑙			
			89	勾玉	4.2	1	0.3 0.25	瑪瑙			
			90	勾玉	2.7	0.75	0.3 0.2	瑪瑙			
			91	勾玉	4.6	1.3	0.4 0.3	瑪瑙			
			92	勾玉	3.2	1.1	0.2 0.1	瑪瑙			
			93	勾玉	3.2	1.1	0.3 0.2	瑪瑙			
			94	勾玉	3.4	0.9	0.2 0.15	瑪瑙			
			95	勾玉	3	0.8	0.25 0.1	瑪瑙			
			96	勾玉	2.3	0.95	0.3 0.15	瑪瑙			
			97	勾玉	2.2	0.8	0.3 0.15	瑪瑙			
			98	勾玉	3.9	1.2	0.25 0.15	瑪瑙			
			99	勾玉	3.5	1.2	0.25 0.15	瑪瑙			
			100	勾玉	3.5	1	0.25 0.15	瑪瑙			
			101	勾玉	3.4	1.1	0.3 0.15	瑪瑙			
			102	勾玉	2.8	1	0.2 0.15	瑪瑙			
			103	勾玉	2.7	0.7	0.15 0.1	瑪瑙			
			104	勾玉	2.1	0.65	0.15 0.1	瑪瑙			
			105	勾玉	2.5	0.8	0.25 0.2	水晶			
			106	勾玉	3.4	1.1	0.35 0.2	水晶			
			107	勾玉	2.8	0.9	0.25 0.1	水晶			
			108	勾玉	2.5	1	0.15 0.15	水晶			
			109	勾玉	1.3	0.6	0.2 0.15	水晶	古墳時代		
			110	勾玉	2.3	0.6	0.25 0.2	滑石			
			111	勾玉	3.1	1	0.25 0.25	滑石			
			112	勾玉	2.7	0.8	0.4 0.25	滑石			
			113	勾玉	1.9	0.7	0.3 0.2	滑石			
			114	勾玉	1.5	0.2	0.3 0.15	滑石			
			115	勾玉	1.2	0.4	0.3 0.15	滑石			
			116	勾玉	1.2	0.35	0.15 0.1	滑石			
			117	勾玉	1.4	0.6	0.15 0.15	滑石			
			118	勾玉	1.6	0.4	0.2 0.15	滑石			
			119	勾玉	1.8	0.5	0.1 0.15	滑石			
			120	勾玉	2.6	0.7	0.3 0.2	滑石			
			121	勾玉	2.5	0.7	0.2 0.25	滑石			
			122	勾玉	2.7	0.6	0.2 0.2	滑石			
			123	勾玉	3.4	0.7	0.2 0.1	滑石			
			124	勾玉	3	0.7	0.2 0.2	滑石			
			125	勾玉	1.7	0.5	0.15 0.15	滑石			
			126	勾玉	1.6	0.45	0.2 0.2	滑石			
			127	勾玉	2.4	0.9	0.45 0.3	滑石			
			128	勾玉	2.8	0.7	0.3 0.15	滑石			
			129	勾玉	2.7	0.8	0.3 0.25	滑石			
			130	勾玉	2.3	0.7	0.25 0.15	滑石			
			131	勾玉	3.2	0.8	0.5 0.35	滑石			
			132	勾玉	3.6	0.8	0.2 0.2	滑石			

1

〔引出上段〕
〔墨書〕
神世
瓊瑤
〔墨書〕
明治十三年
庚辰十二月
二十八日為北
海老先生題
松藤如鶴氏

引出上段

表1 大首飾り玉類計測表(3)

番号	収納箱/箱書	収納位置	番号	資料名称	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	孔径:左右 (cm)	素材	時代	備考
1	(引出上段) 〔墨書〕 神世 瓊瑤 〔墨書〕 明治十三年 庚辰十二月 二十八日為北 海老先生題 松藤如鶴氏	引出上段	133	切子玉	3.5	1.8	0.5 0.2	水晶	古墳時代	
			134	切子玉	1.5	1.1	0.2 0.1	水晶		
			135	切子玉	1.7	1.2	0.2 0.1	水晶		
			136	切子玉	3.3	1.6	0.4 0.3	水晶		
			137	切子玉	3	1.6	0.4 0.2	水晶		
			138	切子玉	2.5	1.5	0.5 0.15	水晶		
			139	切子玉	3.5	1.5	0.5 0.2	水晶		
			140	切子玉	2.8	1.8	0.4 0.2	水晶		
			141	切子玉	2.2	1.7	0.5 0.2	水晶		
			142	切子玉	1.9	1.4	0.5 0.2	水晶		
			143	切子玉	2.4	1.7	0.6 0.3	水晶		
			144	切子玉	2.3	1.6	0.3 0.2	水晶		
			145	切子玉	2.5	1.8	0.4 0.3	水晶		
			146	切子玉	2.6	1.5	0.3 0.2	水晶		
			147	切子玉	2.8	1.6	0.25 0.15	水晶		
			148	切子玉	2.5	1.7	0.5 0.15	水晶		
			149	切子玉	2.8	1.4	0.4 0.3	水晶		
			150	切子玉	2.9	1.8	0.5 0.25	水晶		
			151	切子玉	2.9	2.3	0.4 0.25	水晶		
			152	切子玉	1.6	1.1	0.5 0.3	水晶		
			153	切子玉	1.9	1.2	0.4 0.2	水晶		
			154	切子玉	2.1	1.2	0.4 0.3	水晶		
			155	切子玉	1.6	1.1	0.25 0.25	水晶		
			156	切子玉	1.6	1.4	0.3 0.15	水晶		
			157	切子玉	1.8	1.4	0.25 0.15	水晶		
			158	切子玉	2.3	1.2	0.5 0.15	水晶		
			159	切子玉	1.7	1.2	0.3 0.15	水晶		
			160	切子玉	1.6	1.1	0.3 0.2	水晶		
			161	切子玉	1.6	1.2	0.3 0.15	水晶		
			162	切子玉	1.8	1.6	0.4 0.25	水晶		
			163	切子玉	1.5	1.2	0.3 0.25	水晶		
			164	切子玉	1.6	1.2	0.3 0.1	水晶		
			165	切子玉	1.8	1.6	0.4 0.15	水晶		
			166	切子玉	1.5	1.3	0.3 0.1	水晶		
			167	切子玉	1.9	1.2	0.45 0.2	水晶		
			168	切子玉	2.1	1.3	0.4 0.25	水晶		
			169	切子玉	1.8	1.4	0.4 0.2	水晶		
			170	切子玉	2	1.1	0.4 0.2	水晶		
			171	切子玉	1.5	1.1	0.3 0.1	水晶		
			172	切子玉	1	0.6	0.3 0.15	水晶		
			173	切子玉	1.1	0.9	0.2 0.2	水晶		
			174	切子玉	1	0.8	0.2 0.15	水晶		
			175	切子玉	1	0.9	0.3 0.25	水晶		
			176	切子玉	1.1	1	0.4 0.2	水晶		
			177	切子玉	1.3	0.9	0.5 0.2	水晶		
			178	切子玉	1.2	1.1	0.3 0.1	水晶		
			179	切子玉	1.2	1.1	0.4 0.2	水晶		
			180	切子玉	1.3	1	0.5 0.1	水晶		
181	切子玉	1.1	1	0.3 0.1	水晶					
182	切子玉	2.1	1	0.3 0.1	水晶					
183	切子玉	0.8	0.9	0.2 0.1	水晶					
184	切子玉	1	1.1	0.3 0.2	水晶					
185	切子玉	1.2	1.1	0.35 0.2	水晶					
186	切子玉	1.4	1.4	0.3 0.1	水晶					
187	切子玉	2.5	1.2	0.5 0.2	水晶					
188	切子玉	2.1	1.4	0.4 0.2	水晶					
189	切子玉	1.4	1.1	0.35 0.25	水晶					
190	切子玉	1.2	1	0.3 0.2	水晶					
191	切子玉	1.3	1	0.3 0.2	水晶					
192	切子玉	1.2	1	0.4 0.2	水晶					
193	切子玉	1.4	1.1	0.3 0.15	水晶					
194	切子玉	1.5	1.1	0.3 0.15	水晶					
195	切子玉	1.2	1	0.25 0.1	水晶					
196	切子玉	2.4	1.3	0.5 0.2	水晶					
197	切子玉	0.8	1	0.3 0.15	水晶					
198	切子玉	1.2	1	0.25 0.1	水晶					

表1 大首飾り玉類計測表(4)

番号	収納箱 / 箱書	収納位置	番号	資料名称	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	孔径:左右 (cm)	素材	時代	備考
1	〔引出上段〕 〔墨書〕 神世 瓊瑤 〔墨書〕 明治十三年 庚辰十二月 二十八日為北 海老先生題 松藤如鶴氏	引出上段	199	切子玉	1.2	0.9	0.3 0.15	水晶	古墳時代	
			200	切子玉	1.3	1.3	0.4 0.15	水晶		
			201	丸玉	1.7	1.4	0.2 0.25	水晶		
			202	丸玉	1.7	1.3	0.2 0.25	水晶		
			203	丸玉	1.8	1.6	0.3 0.3	水晶		
			204	丸玉	1.6	1.4	0.3 0.3	水晶		
			205	丸玉	1.6	1.4	0.3 0.3	水晶		
			206	丸玉	1.7	1.4	0.3 0.3	水晶		
			207	丸玉	1.6	1.5	0.2 0.2	水晶		
			208	丸玉	1.6	1.5	0.2 0.2	水晶		
			209	丸玉	1.6	1.5	0.2 0.2	水晶		
			210	丸玉	1.6	1.5	0.2 0.2	水晶		
			211	丸玉	1.5	1.6	0.3 0.3	水晶		
			212	丸玉	1.9	1.4	0.3 0.3	水晶		
			213	丸玉	1.8	1.5	0.3 0.3	水晶		
			214	丸玉	1.8	1.4	0.3 0.3	水晶		
			215	丸玉	1.6	1.5	0.3 0.3	水晶		
			216	丸玉	1.6	1.3	0.3 0.3	水晶	近代	
			217	丸玉	1.7	1.4	0.3 0.3	水晶		
			218	丸玉	1.6	1.3	0.25 0.25	水晶		
			219	丸玉	2	1.7	0.4 0.3	水晶		
			220	丸玉	1.8	1.6	0.3 0.3	水晶		
			221	丸玉	0.7	0.7	0.15 0.15	瑪瑙		
			222	丸玉	0.9	0.9	0.15 0.15	瑪瑙		
			223	丸玉	1	1	0.15 0.15	瑪瑙		
			224	丸玉	1.3	1.3	0.45 0.3	瑪瑙		
			225	丸玉	0.8	0.8	0.15 0.1	瑪瑙		
			226	丸玉	0.8	0.8	0.1 0.1	瑪瑙		
			227	丸玉	0.9	0.9	0.15 0.15	瑪瑙		
			228	丸玉	0.8	0.8	0.2 0.2	瑪瑙		
			229	丸玉	0.8	0.8	0.15 0.15	瑪瑙		
			230	丸玉	0.8	0.8	0.1 0.1	瑪瑙		
			231	丸玉	0.9	0.9	0.15 0.15	瑪瑙		
			232	管玉	1.3	0.9	0.3 0.3	瑪瑙	近代	
			233	管玉	2.5	0.7	0.3 0.3	滑石	古墳時代	
			234	管玉	2	0.65	0.4 0.3	滑石		
			235	八角玉	3	3	0.6 0.6	瑪瑙	近代	
			236	勾玉	1.7	0.7	0.15 0.15	ガラス	古墳時代	
			237	大珠	2.8	1.6	0.6 0.5	硬玉	縄文時代	
			238	金環	3	0.6		銅	古墳時代	
			239	銀環	3.4	0.8		銅	古墳時代	
			240	銀環	2.8	0.55		銅	古墳時代	
			241	銀環	3.2	0.5		銅		
242	銀環	3	0.4		銅					
243	銀環	3.4	0.8		銅					
〔藏品目録〕										
但										
一 金環 壹個										
一 銀環 五個										
一 勾玉 大小 六十個										
一 管玉 七十三個										
一 切子玉 六十九個										
一 丸玉 三十一個										
一 石 壹個										
一 勾玉首掛 壹連										

に比定される硬玉製品である。赤瑪瑙の六角管玉(232)、赤瑪瑙製丸玉(221)、赤瑪瑙製丸玉(222)、赤瑪瑙製丸玉(224～225)は近代の所産であろう。

Dは、垂下する際に首を通す部位となり、主珠一連を垂下する金環1点(238)と銀環5点(239～243)、水晶切子玉16点(136～151)と煙水晶製丸玉18点(201～218)が交互に配置され環状をなす。一周約90cmを計る。239の銀環には角切りの木札が紐付けされ、表裏に「馬角」「第壹」と墨書される。卵形を呈する煙水晶製丸玉は、近世～近代の所産と考えられる。

Eは、中央の環Dに頭を通したときに背中中央に垂下する一連で、総長は23cmを計る。碧玉製管玉4点(69～72)と小型の水晶製切子玉4点(152～154)と先端には最大長4.5cmを計る弥生時代の硬玉製勾玉(86)が取り付けられる。勾玉は大振りで腹の挟りの浅い重厚なもので頭頂部には長さ1.5cm、幅0.5cmの一条が装飾的に施される。孔は0.6cmを計り垂直に穿たれる。色調は孔下方全体に濃緑色の翡翠輝石独特の発色を観察することができ、頭部は全体に白色翡翠が風化し茶褐色を呈している。全体に丁寧に研磨されており遺存状況は良好である。

F・Gは、首に架けた際に正面最下部の左右に位置する。Fは、総長32cmを計り、碧玉製管玉8点(61～68)と赤瑪瑙勾玉7点(98～104)を交互に連ね先端に硬玉製勾玉(85)を接続する。何れも古墳時代の所産で碧玉製管玉は、出雲花仙山の碧玉を素材とした古墳時代前期の所産で、赤瑪瑙勾玉の多くは古墳時代後期に比定される。硬玉製勾玉(85)は、全長4.6cmと大振りで挟りの浅い三日月形を呈している。色調は全体に淡い若草色を呈している。Gは、総長33.2cmを計り、碧玉製管玉8点(38～45)と赤瑪瑙勾玉6点(92～97)を交互に連ね、硬玉製勾玉(84)を間に入れ、主珠の赤瑪瑙勾玉(91)の前に小型の水晶製切子玉(189)を配置する。Fと同じく碧玉製管玉は、出雲花仙山の碧玉を素材とした古墳時代前期の所産で、赤瑪瑙勾玉の多くは古墳時代後期に比定される。硬玉製勾玉(84)は風化が進み淡茶褐色を呈する。本来はFのように先端の主珠に硬玉製勾玉(84)が用いられていたものと思われ、後世何らかの要因で入れ替わった可能性も考えられるが想像の域を出るものではない。

H・Iは、垂下した際に胴部の左右に位置する。Hは、総長35.3cmを計り、碧玉製管玉4点(8～11)と水晶製切子玉5点(167～171)を交互に配置し、滑石製勾玉(113)、水晶製切子玉(116)、滑石製勾玉(90)、水晶製切子玉(165)、赤瑪瑙製勾玉(112)、煙水晶製丸玉(219)、赤瑪瑙勾玉(89)の順に連ねている。Iは、総長32.3cmを計り、碧玉製管玉4点(4～7)と水晶製切子玉5点(156～160)を交互に配置し、滑石製勾玉(110)、水晶製切子玉(161)、赤瑪瑙製勾玉(87)、水晶製切子玉(162)、滑石製勾玉(111)、煙水晶製丸玉(220)、赤瑪瑙勾玉(88)の順に連ねている。

J・Kは、垂下した際に背中左右に位置する。Jは、総長58.3cmを計り、Dの銀環(240)に接続された赤瑪瑙製丸玉(231)を起点に、碧玉製管玉15点(46～60)と水晶製切子玉11点(190～200)、滑石製勾玉8点(125～132)を連ね先端に碧玉製勾玉(77)を置く。Kは、総長59.6cmを計り、Dの銀環(242)に接続された水晶製切子玉(176)を起点に、碧玉製管玉13点(25～37)と水晶製切子玉12点(177～188)、滑石製勾玉7点(118～124)、硬玉製勾玉1点(83)を連ね、先端に碧玉製勾玉(74)を置く。碧玉製管玉・勾玉共に濃緑色を呈する出雲花仙山の碧玉であろう。

大首飾りの製作年代と評価

さて、この一連の玉類を連ねた時期であるが、瑪瑙製管玉や煙水晶製丸玉など近代の所産と考えられる玉類を多数含んでいることから、製作年代は明治時代以前に遡り得ないものと考えられる。加えて武四郎自らが一連に繋げたという記録もなく、付随する文書類も見当たらないため、その来歴は現時点では不明と言わざるを得ない。このような玉を連ね宝器とした事例は、出雲国造家の宮中献上品である御統玉が想起され、文献記録には、この大首飾りに近似する例も散見される。雑記帖『乗合舟』には、木

村蒹葭堂（1736-1802）所蔵の「對島國住吉神社社寶の御統」（図2）が知られる。これは、土佐人苅谷良蔵が寛政7年（1795）八月五日に写したものである。また、藤貞幹（1732-1797）が寛政元（1798）年頃から病没する寛政9（1797）年まで、石器や曲玉等の考古学的遺物を材質や用途で分類・整理して描いた未完の大著『集古圖』にも「對島國住吉神社社御寶曲玉圖」として所載されている（図3）。ここには、212個の管玉と6個の勾玉で構成され、総長は3尺（約91cm）と記される。直径1尺を計る環状部に首を通すネックレスのごとき使用が想起される。首元には州浜状に細工した板状の莊嚴具と、垂下する管玉の上部には2個の勾玉を配し、そこから管玉を横断させ、その中央には湾曲させた板状の莊嚴具が描かれている。最下部には両端に大きめの勾玉が2個配置されている。さらに、水戸藩の国学者栗田寛（1835-1899）の『葬禮私考』（中澤・宮崎 2011a）には、「對島國住吉神社社神寶曲玉図」とあり、「淡海隱士石亭珍藏」とある（図4）。「淡海隱士石亭」すなわち木内石亭（1725-1808）の蔵品として記録される。すなわちこの玉は蒹葭堂、貞幹、石亭の三者の好古家の蔵品となっていたものと理解できる。加えて久留米藩士矢野一貞（1794-1879）の『筑後將士軍談』には、「熊本藩小山川薩所贈之図」として「對馬住吉神社御神寶縮図」に住吉神社の玉が描かれており（図5）（清野 1944）、他の3点と異なり上部に接続された4カ所の勾玉から分枝させ、さらに金環や管玉、玻璃玉を誂え華飾を加えたものが描かれている。何れにしても現在この一連の玉の所在は不明であるが、記録上の出所である「對島國住吉神社」は、現在の長崎県対馬市美津島町鴨居瀬字住吉491番地に所在する住吉神社と想定される。『延喜式神名帳』所載の対馬島下縣郡住吉神社は、名神大社であり、舒明天皇弍年八月に遣唐使犬上相の参拝があり、代々国司国主の崇敬を受け、治承4（1180）年には対馬守源親光が社殿を補修したと伝えられる。文治年間（1185～1190）には、神社帳に津口和多女御子神社と記され、江戸時代の貞享年間（1684～1687）の神社誌には、柴瀬戸住吉大明神と記載される。明治3（1870）年11月14日、住吉大明神の社号を改め和多女御子神社と称せられ、明治7（1874）年5月18日村社に列せられる。昭和18（1943）年1月11日神社名変更を許可され、住吉神社と号するに至った経緯がある。

また、別の事例として『葬禮私考』（中澤・宮崎 2011b）所載の「陸奥國安達郡二本松横須村角水精二/圓形水精七十六/其色數種光彩絜然/貫以紅絲」とある。この玉を蔵したとされる修験大照院は、管見において確認することは叶わなかったが、おそらく土地柄安達修験に属した寺院の一つであったことが推定される。安達修験は、阿武隈川を堺に西安達と東安達に分かれ、それぞれ熊野先達である本山派の2つの年行事職が置かれ、西安達三八郷余は、安達太良山念久寺大音（恩）院が正年行事として安達の絵本山格であり安達先達といわれ、安達太良山連峯を国峯としていた。大音院の出自は明らかでないが、旧跡は福島県二本松市本町の久保丁坂付近であったとされ、隣接した栗ヶ柵と並ぶ軍事上重要な拠点であり、山伏を擁した小砦の機能をもっていたと考えられている（月光 2000）。

新しい事例であるが、玉類を連ね神前に奉獻するものとして、奈良県天理市石上神宮の例が知られる（大場 1982）。明治7（1874）年、石上神宮宮司、菅正友は教部省の許可を得て、石上神宮禁足地を発掘し、多数の神宝を掘り出した。その子息菅幸次郎旧蔵の『古器彙纂』に付図として「石上神宮宝器」として掲載される玉類は、菅正友が禁足地から出土した琴字形石製品、勾玉、管玉、金環等を連珠に仕立て、鏡や鏃と共に木箱に納入し、翌年宝庫に納めた記録である（図7）。大首飾りと同様、玉類を組み合わせ一連に仕立てるといふ発想の共通性は偶然ではなからう。このように、神宝や修験の法具とし

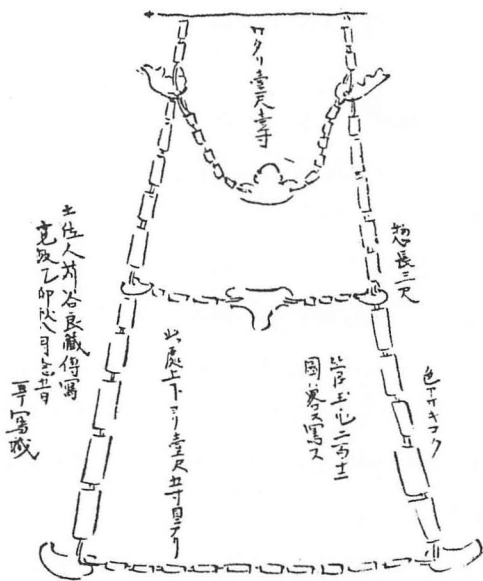


図2 「對島國住吉神社社曲玉圖」
『乗合舟』

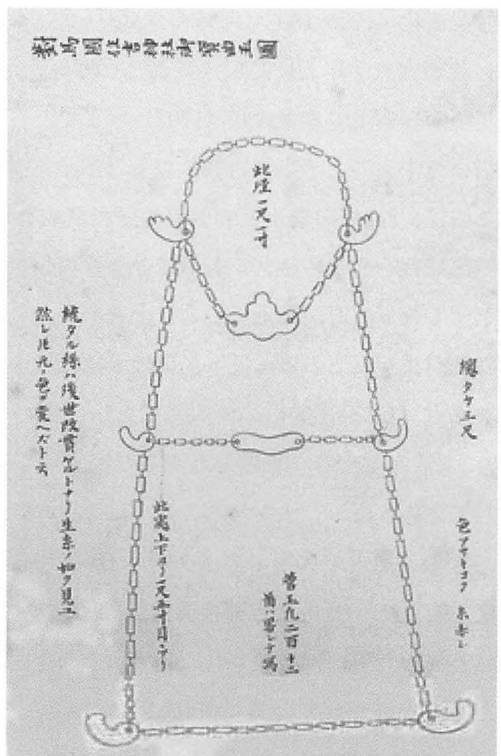


図3 「對島國住吉神社社實の御統圖」
『集古圖』

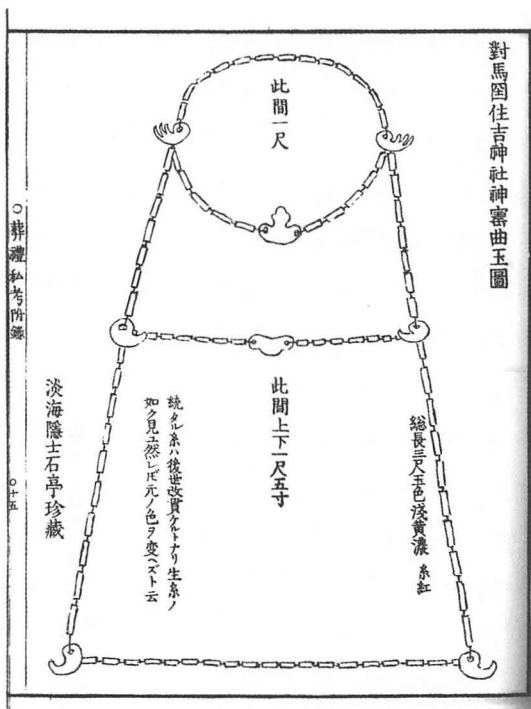


図4 「對島國住吉神社社神寶曲玉圖」
『筑後將士軍談』

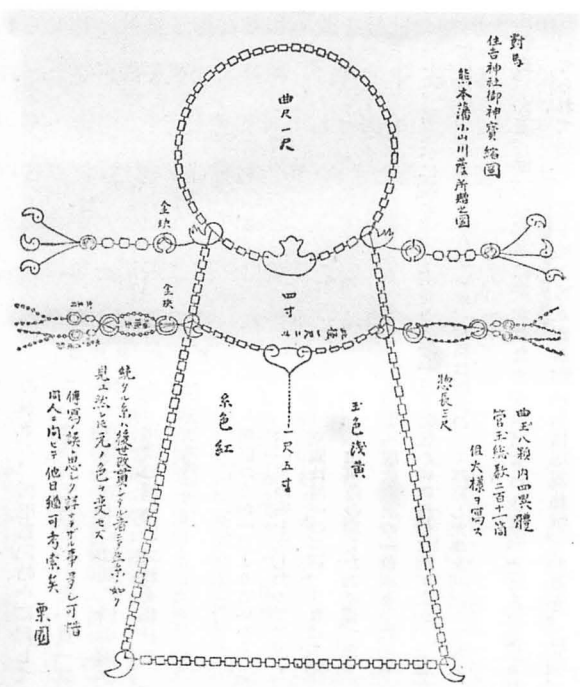
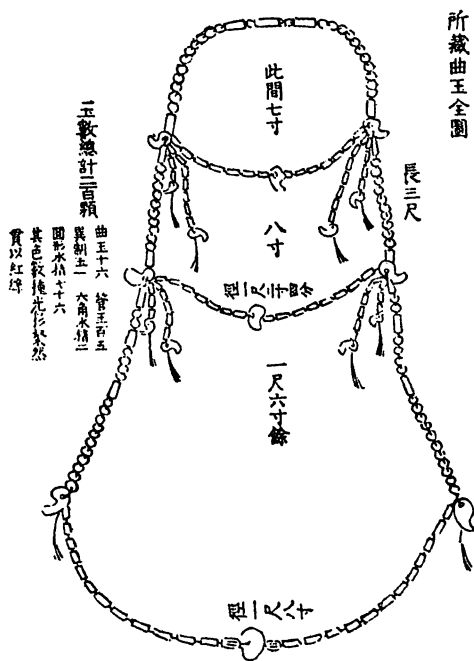
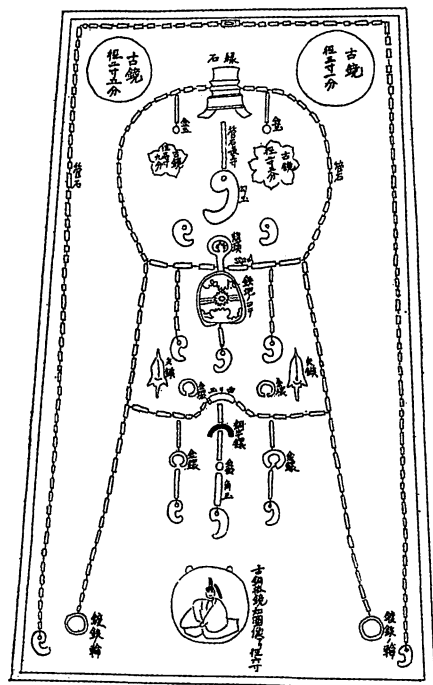


図5 「對馬住吉神社御神寶縮圖」
『葬禮私考』



陸奥國安達郡二本松横須村修験大照院所蔵曲玉全圖
所蔵曲玉全圖



石上神宮宝器『古器彙纂』

図6 「陸奥國安達郡二本松横須村修験大照院所蔵曲玉全圖」
『葬禮私考』

て玉を連ね設えるかたちは、少なくとも江戸後期には発現しており、大首飾りは武四郎が自由な発想にもとづいて製作したのではなく、書物による知識やあるいは実物を見知った上で詠えたものと理解できるのではなかろうか。

結びにかえて

以上、静嘉堂が所蔵する松浦武四郎蒐集古物のうち、唯一の肖像写真に写る大首飾りについてみてきた。肖像写真に映る大首飾りと実物には多少の違いが認められるが、明治21（1888）年に武四郎が没するまでの6年の歳月を考えれば、その間に多少の入れ替えや補修があってもおかしくはない。実際、明治16（1883）年頃から明治19（1886）年にかけて河鍋暁斎による『武四郎涅槃図』の制作もあり、大首飾りをはじめ武四郎自慢の古物が頻度よく取り出されていた事を考えれば、見栄えを考慮して玉を入れ替える事なども行われても不思議ではない。先にも述べたように、仕立ての発想は製作者の深い教養に基づくものであり、加えて玉の配置にも工夫を凝らしていたことが理解できる。すなわち首を通して胸の正面に来る部位（図1-C）には、硬玉製勾玉4点（79～82）と縄文時代の硬玉製垂飾（237）1点などが充てられ、さらにその下部（図1-A）には、碧玉製（73）と水晶製（236）の勾玉を中心にバランスが取られる。左右（図1-F・G）には碧玉製の管玉（38～45・61～68）と赤瑪瑙製の勾玉（92～104）を連ね、先端には大形の硬玉製勾玉（85）と赤瑪瑙製勾玉（91）を配置するなど垂下した時の見え方を熟考し、配置をおこなっている。また、背面（図1-J・K）には、滑石製勾玉（118～132）など比較的地味な素材を用いていることが理解できる。但し、背面でも背中の中央（図1-E）には、

とりわけ大型の弥生時代の硬玉製勾玉（86）を充てるなど、製作者の芸術的感覚も見て取れ、高い教養を感じずにはいられない。このような点から玉を連ねた、あるいはそれを指示した人物は、持ち主である松浦武四郎その人であった可能性は高いものと思われる。

243個を数える玉は絹の撚糸によって連ねられていることから、個々を取り外して細部に渡る観察や記録を取ることが困難であるため、今のところ全体の形状や素材の相違が解るように一面だけの全体図を起こしたに留まっている。将来的には個々の実測図を製作する作業を通して、より詳細な観察によるデータ化を行いたいと考えている。

引用・参考文献

- 内川隆志編 2013『静嘉堂文庫蔵松浦武四郎蒐集古物目録』科学研究費補助金（課題番号22601009「博物館における人文資料形成史の研究－静嘉堂文庫所蔵松浦武四郎旧蔵資料の研究を公開－」平成22年～平成24年による刊行）
- 大場磐雄 1982『神道考古学講座』第5巻 雄山閣 71～72頁
- 清野謙次 1944『日本人種論變遷史』小山書店 336頁
- 月光善弘 2000『東北霊山と修験道』山岳宗教叢書 7 名著出版 522-527頁
- 中澤信弘・宮崎和廣変 2011a『好古研究資料集成』巻六 考古官職編 267頁
- 中澤信弘・宮崎和廣変 2011b『好古研究資料集成』巻六 考古官職編 266頁

國學院大學學術資料センター准教授